

平成22年 5月 26日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520161
 研究課題名（和文）上方学芸史の研究

研究課題名（英文） A Study of the History of *Kamigata* Learning

研究代表者 西田 正宏 (NISHIDA MASAHIRO)
 大阪府立大学・人間社会学部・教授
 研究者番号：00305608

研究成果の概要（和文）：

懐徳堂の助教であった五井蘭洲による『古今和歌集』の注釈書『古今通』を中心に、その注釈に直接の影響を与えた契沖の『古今余材抄』、また地下歌人らの著作について検討し、従来、契沖から宣長へと一足飛びに論じられることの多い「上方学芸史」の間隙を埋めようとした。

また近世初期の出版などについても並行して資料収集に努め、古典の出版であっても、近世に刊行されているという意味で、近世の「学芸史」の問題として捉えようと試みた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to fill a gap between Keichu and Norinaga in “the history of Kamigata learning.” In order to achieve this goal, this study examines mainly Kokintsu (commentaries on Kokinwakashu by Goi Ranshu who was a teacher at Kaitokudo), Keichu's Kokinyozaiho which had a direct influence on the commentaries, and works by common poets.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学（日本文学）

キーワード：国文学・日本史・懐徳堂・契沖

1. 研究開始当初の背景

従来の研究では上方の学芸史上に懐徳堂の和学が取り上げられることがほとんどなかった。懐徳堂は儒学の塾であり、中国古典

の注釈書には眼を向けられることはあっても、日本の古典の注釈書については、大阪大学に懐徳堂文庫が入った折に国文学研究室の雑誌である『語文』で特集号が編まれて以来、まとまった研究は見出せない。

わずかに多治井郁夫氏に五井蘭洲の『古今通』の住吉御文庫本の紹介などを兼ねた伝本の研究があるに過ぎなかった。

しかし多治井論文の興味は、もっぱら伝本の様相や、その刪補の有り様であり、『古今和歌集』注釈史上に、『古今通』を位置づけてはいない。またそもそもが刪補を行った中心人物で五井蘭洲の門弟である加藤景範の年譜考証の一環としての研究であり、蘭洲の考え方が色濃く反映した「蘭洲自筆本」系統の伝本についてのまとまった研究は、皆無であった。

2. 研究の目的

上記の状況を鑑み、五井蘭洲の和学面での代表的な著作である『古今和歌集』の注釈書『古今通』を取り上げ、伝本による相違がどれほどあるのかを確認することを目的とした。『古今通』の伝本は、「蘭洲自筆本」系統と「刪補本」系統の大きく二系統に分かれるのであるが、その二系統の相違について、詳細に検討を加えた。

また、その『古今通』が先行するどのような注釈書の影響を受けているのかを検討し、注釈の形成と方法を考証することを目的とした。

さらにそれらの成果を踏まえつつ、『古今通』を『古今和歌集』の注釈史上に定位することも目的の一つとした。

なお『古今和歌集』の注釈書を取り上げたのは、『古今和歌集』の注釈書は、中世以来多くの注釈書がある代表的な古典であり、「古今伝授」のことなども視野に入れて論じることで、上方の学芸史を考えるうえで、有効だと考えたからである。

3. 研究の方法

まず契沖の『古今余材抄』の方法を検証するために先行注釈書との比較、検証を行った。

続いて、『古今通』を所蔵する図書館や文庫に赴き、原本調査を行い、代表的な伝本を紙焼きやコピーなどで手に入れた。

それらを手元に置き、比較対照して読み進めた。基本的には二系統、四本の伝本を比較対照した。

また『古今通』の注釈の形成について検討するために、中世の代表的な『古今和歌集』の注釈書で、江戸期には版本になっていた宗祇の『両度聞書』や『古今榮雅抄』、また『古今通』が直接影響を受けた契沖の『古今余材抄』、一部引用された形跡のある望月長孝の『古今仰恋』などと比較し、その影響関係について検討した。

さらに『古今通』の注釈の達成について考

えるために本居宣長の『古今集遠鏡』との比較検討も行った。

4. 研究成果

初年度は主として契沖の『古今余材抄』についての研究を中心に進め、「古今和歌集注釈史と誤読」という論文を著した。

ここでは『古今余材抄』の『古今和歌集』注釈史上における特色について先行する注釈書と比較検討することで導き出そうと試みた。結果として『古今和歌集』の様々な先学の「よみ」で誤っているものを「誤読」と認定し、そのうえで自説を展開したところに『古今余材抄』の特徴が認められるとした。『古今余材抄』以前の注釈書、特に中世の様々な注釈書は、流派意識の中で、編纂され、もっぱら「家の説」を説くことに熱心であり、「よみ」そのものの「正誤」という観念が十分に発達していなかった。そこに契沖は、「よみ」そのものの「正しさ」「誤り」ということを持ち込み、歌一首を「正しく」理解することを目指したのである。

さらにこのような姿勢は『古今余材抄』以降の『古今和歌集』の注釈に踏襲されるものであることを検証し、五井蘭洲の『古今通』にもその姿勢が窺われることを述べた。

また『古今余材抄』の享受という視点から本居宣長の『古今集遠鏡』をとりあげ、宣長が『古今余材抄』をどのように評価しているのかを検討した。特に評価しない場合、つまり『古今集遠鏡』が『古今余材抄』について「わろし」としている注釈を取り上げ、どのような点を「わろし」と認定しているのかについて検討した。

合わせて五井蘭洲の『古今通』についても言及し、古今集注釈史における『古今通』の意義についても述べた。

これらのことは『古今集遠鏡』と『古今余材抄』という論文として発表した。

二年目は、前年度の論文で既に取り上げていた『古今通』の本格的な研究に取り組み始めた。

主として『古今通』の伝本の調査、研究を中心に進めた。その成果として、「『古今通』夏部四本対照翻刻」を『上方文化研究センター研究年報』第10号に公表した。

『古今通』の伝本は大きく二系統（五井蘭洲の直接の注釈が反映した「蘭洲自筆本」系統と加藤景範ら門弟により刪補された「刪補本」系統）に分かれる。

その伝本のうち「蘭洲自筆本」系統として、「大阪府立中之島図書館本」と「ノートルダム女子大学蔵本」を、「刪補本」系統として、「国会図書館本」と「国文学研究資料館蔵初雁文庫本」を、紙幅の関係で「夏部」に限ってはあつたが翻刻した。

加えてそれぞれの伝本に関しての簡単な解題を付し、また問題を指摘し、今後の研究への足がかりとした。

翻刻を試みたのは、一部ではあるが、未翻刻の資料であり、『古今通』の伝本の様相を窺ううえでも一定の意義を有すると思われる。

また「上方学芸史」において契沖と蘭洲をつなぐ人物として注目される有賀長伯の歌学と実際の歌作についての研究を、『中世近世和歌文芸論集』（日下幸男編、2008年12月、思文閣出版刊）に発表した。

そこでは、「女郎花」という歌語に注目し、長伯の詠作が、自身の著した歌学の啓蒙書と密接に関わり合うものであること、むしろ歌学書の実践というかたちで歌が詠まれていることを論証した。

さらにその有賀長伯の直接の師である平間長雅の関わった「堺伝授」について講演し、講演録としてまとめた（「古今伝授をめぐって—堺伝授とは何か？—」、『フォーラム堺学』第十五集、2009年3月、財団法人堺都市政策研究所刊）。

中世における「堺伝授」は資料が残っていないこともあり、解明されていない。かろうじて肖柏らが関わったことが確認されるばかりである。しかし、近世の資料に目を向けてみると、その伝授を引き受けたとされる平間長雅の箱伝授のこと、また長雅が直接、堺の住人（岡高倫）に歌道伝授を行ったことなどが浮かび上がってくる。講演の活字化ということもあり、十分には論じ尽くせていないけれども、「上方学芸史」を考える視点の一つを示すことはできたと思われる。

最終年度も、前年度に引き続き、『古今通』の伝本の調査研究を行い、その成果を『古今通』恋一 四本対照翻刻』として、『上方文化研究センター研究年報』第11号に発表した。

既に前年度の翻刻の解題においても指摘したことであるが、五井蘭洲の意見を反映した「蘭洲自筆本」系統の研究の重要性が、改めて確認された。

特に「恋部」では歌の前に「恋」について説く部分があり、「恋」を「男女の恋」だけには考えない蘭洲独自の考えが表明されているのであるが、それが刪補本系統では全く削除されていたのであった。

さらに、関連する研究として、地下歌人の歌書出版への関与を「偽書の出版」（『文学』2010年5/6月号、岩波書店掲載確定）としてまとめた。

また仮名草子への関与を「古典注釈の変容と展開」（『江戸の知』所収、掲載確定、2010年8月、森話社刊行予定）にまとめた。

時間的な制約、また物理的な量の問題から、当初予定していた『古今通』すべての翻刻に

はいまだ至っていないが、代表的な伝本を四本対照して翻刻するという方法を採用したことで、一系統一種類の伝本のみをより多く翻刻して示すよりも、『古今通』の伝本の有り様から鑑みて、より意味のある翻刻ができたと考える。つまり見開きの対照で示すことで、蘭洲自身の個性的な注釈が、いかに多く削除されているかが一目瞭然に理解できるのである。

この方法はすこぶる有効であると思われる、今後もこの作業については、継続して行いたい。公刊も継続してゆく予定である。

また今回、科学研究費を獲得することで、伝本調査などの基礎的研究から得た知見は多くあり、このことについては、2010年度以降、研究論文としてまとめる予定である。

また今回の『古今通』の研究を通して、懷徳堂における和学の様相について考察する必要を改めて痛感した。

『古今和歌集』だけではなく、視点を拡げて、『伊勢物語』の注釈書『勢語通』や、『詠歌大概』の注釈書などにも目配りしておくために、一部ではあるが、伝本の調査を行った。

また、そのことを課題として2010年度の科学研究費の申請も行った（採択された。課題名は「懷徳堂の和学の研究」）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①西田正宏、『古今通』恋一 四本対照翻刻、『上方文化研究センター研究年報』第11号、2010年3月、pp.33~101、大阪府立大学上方文化研究センター刊、査読なし

②西田正宏、『古今通』夏部四本対照翻刻、『上方文化研究センター研究年報』第10号、2009年3月、pp.20~51、大阪府立大学上方文化研究センター刊、査読なし。

③西田正宏、『古今集遠鏡』と『古今餘材抄』、『文学史研究』第48号、pp.1~10、2008年3月、大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会刊行、査読あり。

④西田正宏、古今和歌集注釈史と誤読、『江戸文学』36号 pp.7~18、2007年5月、ペリかん社刊、依頼論文

〔学会発表〕（計 1 件）

①西田正宏、『古今通』の方法と達成—上方学芸史の構築をめざして—、2007 年 7 月 8 日、大阪市立大学国文学会、大阪市立大学

〔図書〕（計 2 件）

①西田正宏、古今伝授をめぐる一堺伝授とは何か？—、『フォーラム堺学』第十五集、pp.113～141、2009 年 3 月、財団法人堺都市政策研究所刊

②西田正宏、歌学と実作と—有賀長伯のばあい—（日下幸男編『中世近世和歌文芸論集』pp.253～273、2008 年 12 月、思文閣出版刊

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 正宏 (NISHIDA MASAHIRO)
大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：00305608